

**サンゴ礁保全の意義を知る [『サンゴの海に生きる
：石垣島・白保の暮らしと自然』野池元基著]**

著者	梶 裕史
出版者	法政大学人間環境学会
雑誌名	人間環境論集
巻	14
号	1
ページ	29-34
発行年	2013-06
URL	http://hdl.handle.net/10114/8335

サンゴ礁保全の意義を知る

梶 裕 史

『サンゴの海に生きる 石垣島・白保の暮らしと自然』（野池元基著／農山漁村文化協会）1990年

「地球環境問題の縮図」のシマから一色褪せない発信価値

今年（2013年）3月、沖縄県八重山諸島の石垣島に「八重山群民30年来の悲願」とされる新空港が開港し、島は（表面的に）慶祝モードに包まれました。開港までの苦難の経緯は、環境問題の縮図ともいえる教訓に満ちています。発端は、1970年代末に、豊かなサンゴ礁を埋め立てて新空港を作る案が降りかかったことにありました。地元・白保地区の住民は強い反対運動を続け、やがて国内外の自然保護団体・学識者等も白保サンゴ礁の世界的な貴重さを知って反対を応援し、政府・沖縄県は計画変更を余儀なくされます。しかし80年代末に出てきた修正案（カラ岳東案）も、依然白保の海とその恵みを受ける住民の生活に多大な影響を及ぼすと予測されたため、賛同を得られず、その後二転してようやく、かろうじて現・新空港の位置（白保地域の北部「カラ岳陸上案」）に決着するという難産ぶりでした。

ここで紹介する『サンゴの海に生きる 石垣島・白保の暮らしと自然』（野池元基著、農山漁村文化協会 1990年）は、最悪の海上埋め立ては免れたものの、なお深刻な二次案に白保が直面していた頃、環境保護活動に携わるジャーナリストによって書かれ、白保住民の視線から、守るべき宝物の価値を説かれたものです。

何のために海を守るのか（「自然保護」とは何なのか）、尊いものを壊してしまう大型公共土木事業の愚かさはどのようなものか……出版から20年以上経った今も、本書は全く古びない輝きをはなっています。なぜなら、「環境に優しく配慮して工事された」（と官制報道される）新空港が完成し、貴重なサンゴ礁は無事残った、と表向きは報道される現在もなお、根本的な問題の構造は変わっていないからです。白保サンゴ礁および白保住民の穏やかな暮らしは、実は健全を保てるかどうか「瀬戸際」の状況にある、と言わざるを得ず、筆者の発信は、賞味期限に喩えれば今もそっくり「旬」である、といえるのです。

「魚湧く」命つぎの海—守るべき「里海」文化

白保サンゴ礁は「北半球で最大級のアオサンゴ群落」をはじめ、多くの専門家の調査により、稀にみる学術的価値が世に知られ、今日でも観光客を魅了する夢幻の美しさを見せてくれますが、かつてその海は、おそらく今より十倍は豊穡で、「魚湧く海」と形容される世界最高級のサンゴ礁でした。

魚、貝、海藻など豊かな幸のおかげで、白保の人々は、太平洋戦争後の仕事も物質も乏しい社会荒廃の時期や、壊滅的な自然災害（1771年「明和の大津波」。白保住民1574名中、生存僅か28名）の後でも、生存者や移住者が、直接食糧にしたり売って換金したりして、食いつないでゆくことができました。

筆者が強調するのはこの「命つぎ」の海のかげがえのなさであり、たとえ経済的に困窮したとしても、海さえ健全ならば、田畑の幸とあわせて命を継いでゆけるというサスティナビリティを訴えることに徹しています。サンゴ礁の学術的な貴重さゆえに守るべき、とする立場とは立脚点を異にします。

今日、こうした「生きる場」を重んじた環境保全の提唱は珍しくありませんが、野池氏の本書はそうした思潮の先駆けといえる内容です。白保のような「生きてゆける場」が、我々の周りにどれほど残っているだろうかという問いかけや、グローバル経済の中の札束など、状況次第で紙きれに過ぎなくなってしまう危うさもあるという警鐘は、今日一層重みを持つと思います。

魚湧く海を活用してきた生活文化は、Ⅱ章「イノーに寄り添う白保の暮らし」Ⅲ章「陸に打ち上げられたサンゴ」Ⅳ章「命つぎの海に白保が救われる時」で、聞き取りによる村人たちの語りを豊かに活かして詳述されています。白保は、基本的に農村です。専業漁師（ウミンチュ）もいますがその数は僅かで、船や凝った漁具を持たない農民でも、農作業の合い間にサンゴ礁に出かけて漁がで

きる地形を持っている（干潮時に沖に向かって渡っていける砂地＝ワタンジが何本もある）ことが、白保の海の大きな特質であり、その結果、半農半漁の豊かな生活文化が築かれてきました。浜に造られた「垣（カチ）」という原始的な囲いによる漁をはじめ、里山になぞらえて「里海」と呼び得る持続的な有効資源利用をしてきたのです。Ⅲ章で紹介されるように、サンゴ礁は食糧としての魚貝・海藻類を育むだけでなく、寿命を終えたサンゴは石材として民家の土台や石垣などの建築材料になりました。

サンゴ礁が防波堤の役割をしてくれることや、観光資源としての価値、CO₂吸収効果など、サンゴ礁を守る意義は沢山ありますが、一つの村の「生きる力」の源、村の存続基盤という視点でみると、白保の人々が伝統的な「里海」文化を守り伝えてゆくことが、サンゴ礁保全の意義を最大限知らしめるためにも、保全活動の実行自体にも極めて有効、ということに読者は気付くはずです。

今日、本書に記録された暮らしぶりは、「かつては」という但し書きが必要なものも多くなり、世代交代も進んでいます。かつてのような自給自足の暮らしは難しくなっていますが、しかし持続可能な暮らしの経験知はまだ村の中に豊富に記憶されており、復活する気になれば不可能ではないものもあります。本書が世に出て20年余りで、白保は相当に変化しました。どのような暮らしを選ぶか—貴重な生活文化の伝統を、海とともに出来る範囲で守り活かしてゆく努力をするか、それとも、新空港開港に伴う大きな開発の波を防ぎきれず、伝統的な宝物を失ってゆくか—基本的には、白保住民の意思如何といえます。

風土にふさわしい「農」の訴えかけ

筆者野池氏は、もしかすると最も読んでほしい読者に、白保住民の中で(当時)空港誘致に賛成した人々を想定して執筆したのではないかと、とも察せられます。

海上埋め立ての一次案の時、白保村は実は一枚岩ではなく、空港反対派・賛成派で二つに割れてしまいました。地域自治の基盤である「公民館」組織が二つ並立するという異常事態が生じ、村の結束の象徴である豊年祭も別々に行われるという悲しい分裂を経験しました。本書はその真っ最中に書かれています。公民館は、空港候補地が三次案として隣の集落の内陸部「宮良牧中案」に移った頃、一つに復し、2000年には四次案「カラ岳陸上案」に賛成の公民館決議をするに至ります。しかしそれは多数決の止むなき結果であり、現・新空港案にもずっと反対を続けた人々も存在します。村の人間関係に深刻な傷跡を残し

た空港問題であるため、賛成決議後に表立って反対意見を述べるのはタブーという配慮があり、本心では反対の人々も、新空港着工を止むなき前提と受容して、精一杯保全のために頑張ってきたといえます。

言い換えれば、人口約1600の白保住民の中には、残念ながら、サンゴ礁保全に関心の低い人も少なからず存するということです。記述に慎重を要しますが、概して、経営規模の大きい農家や空港周辺に地権を持つ地主、土建業者などの中で「海が悪くなっても自分の生計には関係ないさ」と考えるような人は、自ずとサンゴ礁保全に無関心になりがちといえます。それは本書が書かれた時期からあまり変わっておらず、沖縄の本土復帰（1972年）後、国が「土地改良」と称する大がかりな農地改変（実際は改悪）の土木事業を行なった恩恵に浴し、その弊害（赤土流出や地下水脈分断などの自然破壊）よりも経済的利益を優先する人々は、海の状態に鈍感である、と大まかには分類できるでしょう。

本書が未だに通用する価値を持つのは、空港本体の工事のほかに、農地の赤土流出問題に多くのページを割いている点にあります（V章「水」に無配慮な土地「改良」、「水」を活かすシマの「農」、VI章 シマの「農」を無視し、赤土を流出させる土地「改良」）。

今日、沖縄のサンゴ礁衰退の最大の元凶は赤土流出とされ、白化現象による死滅もオニヒトデによる食害も、赤土が堆積するようなストレスの多い場所のサンゴが、より被害を受けやすいという見方が有力です。県も、赤土防止にそれなりに腐心して、一時期の乱開発・垂れ流しの状況から多少は改善されたものの、特効薬たる対策は施されていません—紙数がないため結論だけいえば、対策を公費に頼るのではなく、各農家が農業の営み方について根底から（何が幸せなのかという価値観も含めて）変える努力をしないと、劇的な改善は難しいでしょう。

白保の場合、周囲の排水を集めて海に流れこむ轟川という川からの赤土流出を改善しないと、かつての「魚湧く海」どころか、「健全なサンゴ礁ぎりぎり」と診断される現状を維持するのも危うい状況にあります。白保農家の中でサンゴ礁保全に無関心な人々に意識を変えてもらい、少しでも可能な範囲で、赤土を流さない工夫に協力してもらうことが欠かせません。

「本土並みの経済的な豊かさ」の受益者に、本書の説く生活文化の価値は、頭では理解できても、その伝統の継承に有効な農業の再変革には、私的に大きな犠牲とエネルギーが必要なため「生計が成り立たず、無理」という答えにな

るでしょう。しかしながら、国の多額の補助に頼った沖縄の農業全体が、今の体質のままでは将来がないという声も少なくない中で、自立型で環境調和志向の新しい農業への転換の試みが少しずつ増えてくる期待は持っています。この先そんな機運が高まっていったとすると、その時に本書は、海も陸も全てつながる調和の中で営まれる「農」の豊かさを訴える内容が、哲学的な拠り所ともなり得るでしょう。白保は基本的に「農村」であり、海を悪くしない「農」がサンゴ礁保全に不可欠です。

目覚め始めた白保ネイティブ達

前述の通り、白保公民館は苦渋の末に、今世紀初めに現空港案を受け入れる決議をしました。その後しばらくは、深刻な村の分裂の傷と疲労を癒す必要があったと思われます。その休養期のなか、2005年頃から、注目すべき地域活動が起こります。まず2000年にWWF（世界自然保護基金）Japanの施設「しらほサンゴ村」が出来て、サンゴ礁保全のためには、白保住民主体の、海と共生してきた文化を活かした地域おこしの取り組み支援が有効との方針から、住民に働きかけがなされました。その効果として、2005年に住民有志による「白保魚湧く海保全協議会」が発足します。サンゴ村の事業と連携したその活動は、伝統的な生活文化継承による地域振興と、そのためのサンゴ礁保全をめざすことを公民館公認で謳った「白保村ゆらていく憲章」の制定（2006）、憲章の精神の象徴的な具現化事業としての「海垣」復元再生（同年）、集落内の伝統的な石垣の修景事業（2008～）、ギーラ（ヒメシヤコ貝）放流活動、赤土防止グリーンベルトを期した月桃植え活動、地場産品活性化を狙った「白保日曜日」（2005～）の開催援助、世界海垣サミット開催（2010）、そしてこれらに大人だけでなく地域の小・中学生も参加させて環境教育・次世代養成に資する工夫など、数々の特筆すべき実績を重ねています。「サンゴ礁が以前より良くなったかといえば微妙なので、成果が上がったと言えるのかどうか……」とWWFサンゴ村所長は謙遜しますが、移住者の急増や、迫り来る新空港開港に伴って起こりそうな大きな開発への不安などから、村人たちも無策では静穏なコミュニティが保てないという危機感を徐々に持つようになり、自分たちで団結して出来ることを精一杯やらねば、という気持を持つ住民が増えてきたことは、明るく評価できるものです。

魚湧く海保全協議会は、WWFサンゴ村の企画・事務担当に頼りすぎない真

の自立と、伝統的な生活文化を資源に、経済収益を生み出し集落に還元すること（修学旅行受け入れや地場産品の積極的開発などによるエコツーリズムの育成）をめざして、NPO組織に発展継承される見込みです。本書の筆者野池氏が見れば、安心とはいえないまでも、白保の良心は未だ健在、と期待して見守れるであろう素地が醸成されてきています。

(追記) 以上は、評者（梶）が2007年以降、今年度の新空港開港時まで、数度の現地ヒアリングを行なったことに基づいて多くを記述しています。野池氏の本書を読んで感銘を受けた人は、ぜひ一度白保を訪ねてみてください。広義のエコツーリズムをめざす白保有志の方々にとって、エコツーリストは歓迎すべきゲストのはずですし、現地でエコツーリズムに繋がるプログラムに参加することは、ささやかながら野池氏の願いに協力することになるのですから。